

業 務 名		いわき市震災メモリアル検討会議 先進地視察（神戸）		
開催日時		2015. 7. 03（金）～7. 04（土）	開催場所	神戸（岩屋、淡路市）
参 加 者	検討委員	石丸純一様、強口暢子様、渡邊弘幸様、福迫昌之様、高橋満様、曾我泉美様		
	いわき市役所	赤津俊一課長、千葉伸一郎課長、佐藤拓弥技師		
	トータルメディア	丹治・栞川・荒木	記入者	荒木

視察先	
人・街・ながた資料館、人と防災未来センター、野島断層保存館	
概 要	
■人・街・ながた震災資料館 【施設の概要】 1995年1月17日の阪神淡路大震災を受けて、被災の体験を風化させないために、また、被災地の中の長田区役所に、震災の状況を長く記憶するために、「人・街・ながた震災資料室」を1997年1月に開設し、長田区の震災関係資料を収集・保存するとともに一般公開することにより、後世の人々に継承していく活動を行っている。 【ヒアリングの内容】 ・資料館の資料の保管、管理は地元の有志と神戸学院大学の研究員・学生の有志で行っている。教育機関などの外部との連携で資料を管理することにより、近年では資料の分類が資料室全体の資料数に追いついてきている。 ・資料室では、資料を保管・管理するのみで、貸出や閲覧を自由に行える。近年では、長田区役所7Fの展示室で、公開可能なものを選定し、展示会を開催することで一般に公開している。（常設を行っていない。） ・保管している資料は、基本的に市民・区民に提供してもらったもので構成されており、公開や著作権に関しては特に厳しい制約を設けていない。 →地域密着型、長田区では役所と区民の隔たりが下町ゆえにあまりない。展示をしてほしいという依頼があれば即対応するシステムをとっている。 【質疑応答】 ・Q:長田区役所7Fで開催される展示会の開催期間は決められているのか。 A:震災資料展という形で年1回秋頃開催している。そのほか不定期で開催することもあるが、不定期開催は資料室だけで告知している。その他、要望に合わせて開催を検討するケースもある。 ・Q:資料室に提供される資料に関して、提供者への保管・管理に関する説明は口頭で行われるということだが、今までに何らかの形でトラブルが発生した例はあるか。 A:トラブルが発生したことはない。提供された資料は、一般公開しており、貸出も自由に行っているが、区役所内に設けられた資料室ということでの信頼感があるため、資料提供者も安心して資料を託している。 ・Q:資料室内に保管されている資料を大きく分類するとどのようなカテゴリーに分けることができるか。 A:避難所日誌、当時の様子がわかる資料(手記・写真)に分類することができる。基本的には文書資料(手書きのもの)が多い。 ・Q:文書の取り扱いは区役所として行っているのか。 A:区役所ではなく資料室が独自に行っており、資料も「人・街・ながた震災資料室の資料」という位置づけになっている。資料室のこれまでの活動に対する信頼、そして役所の建物の中にあるということが区民が信頼するポイントであると考え。（区役所内に設けられている資料室でなかったら、資料があまり集まらなかったのではなかろうか。） ・Q:神戸市内で、震災資料の展示を長田区と同じような形で行っていることはあるか。 A:ない。役所の職員の異動が多いため、引き継ぎが難しいので、資料の有効活用ができない状況にある。実際に長田区でも、資料室の中で保管・管理、企画展で公開までは行っているが、それ以上の資料の有効活用は難しい状況にある。長田区としても、資料室開設のきっかけが「震災の経験を風化させたくない」という想いだけで成り立っているところがあるので、人・街・ながた震災資料室のような形として活動を行える例は少ないのではないかと考える。 ・Q:資料室を開設したことで、新たに広がったネットワークなどはあるか A:展示会を開催することで、当時地震を経験された方々から直接体験談を伺う機会が増えた。また、資料室で何度かヒアリング調査を行ったことがあるが、正式な形で行ったものではないので、記録を一般に公開はしていない。 ・Q:資料室開設から18年経つが、これまでどのような想いで活動してきたのか。 A:(区役所職員)役所の中に開設された資料室ということで、職員の引き継ぎなどの問題から収集的な形に重点を置きながらの活動でないと運営が難しいというのが現実で、不安を抱えてはいるが、資料を有効活用させながらどのような形で活動を展開しようかと常に考えながら運営に携わっている。	

(神戸学院大学研究生)資料室の資料は、区役所職員でないといふ内容がわからないものもあるなかで、アドバイスを頂きながら資料の分類を行っている。分類の方法としてキャプションを添付したり、写真をスキャンしてデジタルデータ化を行っている。今後はさらに資料が探しやすいシステムを作っていきたい。

・Q:提供された資料のなかで、どうしてもいらない資料の処理はどうしているのか。

A:捨てずに保管している。個人的なもの(顔が大きく写っている写真など)は公開せず、秘蔵している。

■人と防災未来センター

【施設の概要】

2002 年に国の支援を得て、兵庫県が設置し、公益財団法人ひょうご震災記念 21 世紀研究機構が運営を行っている施設。阪神淡路大震災の経験と教訓に基づき、災害文化の形成、地域防災力の向上、防災政策の開発支援を図り、安心・安全な協働・減災社会の実現に貢献することを課題としている施設。

【施設の構成】

人と防災未来センターでは、展示、資料収集・保存、災害対策専門職員の育成、実践的な防災研究と若手防災専門家の育成、災害対応の現地支援、交流・ネットワークで構成され、機能している。

4F:震災追体験フロア

→阪神淡路大震災の地震破壊のようすを大型特撮映像と音響で体感できるシアターと、震災直後のまちを実物大ジオラマで再現した空間、復興にいたるまでのまちと人の様子をドラマ仕立てで鑑賞できるシアターで構成されている。

3F:震災の記憶フロア

→地震直後や復興過程の生活・まちの姿をメッセージとグラフィックで紹介している。また、震災関係資料を提供者の体験談とともに展示している。フロア内に語り部コーナーも設置しているのが特徴的である。

2F:防災・減災体験フロア

→世界で起こっている自然災害を学習できるコーナーや実験を通して防災・減災について学ぶワークショップコーナー、企画展用のギャラリーを設けたフロア。

【ヒアリングの内容】

・4F震災追体験フロアでは、19 万点の資料を展示スペースのバックヤードに収めている。そのうち 800 点は展示している。その中で小学生にとって難しい内容はジオラマで解説している。

・アーカイブ関係の資料は、資料が散逸してしまう可能性を防ぐため、早い段階から収集活動を行っていた。1995 年1月の地震発生後、同年 10 月に収集保存事業を開始し、それと同時に公開基準の検討と、震災資料の所在調査も行った。

・一次資料(モノ資料、個人的な日記や手記、被災後の看板、写真、仮設住宅の様子を記録した日誌、音声資料、多言語放送、雑誌、行政の刊行物など)は 18 万 7 千点あり、うち 16 万点はセンター開館前に集まったものである。

・二次資料は、資料室に保管している書籍で、これらは貸出を行っている。また、データ化した写真などもデータベースに保管しており、二次資料に関しては資料に関する相談も行っている。

・資料室内の資料の展示は3Fを中心に行っており、展示ケースの中の資料は 3 カ月ごとに入れ替えを行っている。

【質疑応答】

・Q:資料整理のスタッフは現在何人いるのか。

A:4 人で非常勤スタッフである。非常勤スタッフは週 4 日出勤している。

・Q:資料の整理作業は、資料数に追いつけているのか。

A:19 万点の資料のうち、18 万点の整理が終了している。現在は、提供される資料も少なくなってきた。

震災直後は、資料収集と調査に行く人と、資料に関する情報を入力する人で役割を分担していた。累計 400 名が資料調査に関わっていた。トータルメディアからも 15 名のスタッフが関わっていた。

・Q:資料の公開基準について、公開できないものとしてどのようなものが挙げられるか。

A:個人情報・著作権が関わってくるものについては公開していない。公開基準は資料専門員の判断で行っている。また、研究会などで公開基準を決議されることもあるため、それに倣った形で公開基準を定めている。

・Q:研究員は常駐しているのか。

A:6Fに常駐している。

・Q:震災体験コーナーのシアターについて、シアター上映中に気分が悪くなる人はいるのか。

A:いる。小学校の社会科見学や、幼稚園の遠足などで訪れる団体客が多い。シアターを出てすぐ救護室があるため、そこで看病に当たっている。

・Q:震災体験コーナーについて、語りべはどのように募集しているのか。

A:語りべは有志で行っていて、年に一回HPで老若男女問わず募集している。

・Q:年間来館者 50 万人はどのような人たちで構成されているのか。

A:小中学生が多い。来館者のうち 8 割は兵庫県外の方々である。

・Q:配布される災害学習ノートはいつ使うものなのか。

A:学校見学の事前学習用や、見学当日の穴埋め形式のワークシート代わりに使用されることが多い。
HPでpdfでも公開している。

・Q:3Fで展示されている一次資料800点の入れ替えは行われるのか。

A:基本的には常設展のため、入れ替えは無しだが、3カ月に一回入れ替えを行う企画展コーナーを設けている。常設展はキャプション更新も関わってくるため、入れ替えが難しい。入れ替え展示する資料については目録を制作しており、HPで閲覧可能。

・Q:一次資料の貸出は行っているのか。

A:図書館のような形での貸し出しは行っていないが、マスコミに資料として提供することはある。(イメージ画像作成のための参考資料として・撮影セット制作のための参考資料として。)貸し出す相手の審査を行うこともある。

■野島断層保存館

【施設の概要】

阪神淡路大震災時に現れた活断層を樹脂を塗布して保存しており、断層上の民家も展示の中のコースの1つになっている。経営主体は淡路市。断層保存ゾーンでは、断層による様々な地形の変化をカメラやパネル、案内係の解説により観察できる。断層の断面が見られるトレンチ展示や触れる断層も実物で展示している。断層保存ゾーンを抜けると「神戸の壁」の屋外展示がある。「神戸の壁」は、昭和2年頃、神戸市長田区若松町の公設市場の延焼防火壁として建てられたものである。第二次世界大戦中の神戸大空襲(1945年)に耐え残り、阪神・淡路大震災では周囲の建物が倒壊全焼する中、この壁だけは倒れず、焼けず、その姿をとどめた。震災の記憶を風化させないための震災遺構として、阪神・淡路大震災の教訓を末永く後世に伝える北淡震災記念公園に「神戸の壁」を移設し、震災から得た教訓と防災に対する意識を発信させている。震災メモリアルハウスでは、活断層の真横でもほとんど壊れなかった家を「地震に強い家」として公開している。家の塀や花壇の煉瓦がずれた様子、当時の台所も再現している。毎週火曜日には『震災の語りべ』が体験談を語るイベントも開催している。

【ヒアリングの内容】

・震災直後、北淡町の防災関係業務において、断層学者の方々が断層が顕著に表れた場所を調査していた。北淡町に現れた断層は学術的に貴重だと判断されたため、ブルーシートで暫定的に囲い、保護されていた。

・1995年1月31日、調査にあたっていた学者団が、町長に断層を何らかの形で残してほしいという要望を提出し、同年4月1日これが了承され、町長から改めて断層を保存することが発表される。その結果文科省によって検討委員会が立ち上げられ1997年に委員会が発足される。断層のどの部分を保存することが適切かという議題において、淡路で顕著に断層が現れたことと、保存する環境として適切であったことから、天然記念指定を念頭に置いて検討が行われる。その結果、断層を屋内保存することが決定された。

・当時、住民からは住宅建設を優先するべきではないのかという非難の声が殺到した。しかし町長は、北淡が早く復興したということと、自然の驚異を風化させないことが後世にとって最も重要であると判断し、保存館建設計画を継続させた。

・当時、財政は非常に逼迫していたが、兵庫県と協力し、県が建設資金を提供し、北淡は運営中心に活動を行う体制をとった。そのため、北淡町は県に毎月賃料を収めている。また、JRAが10億円寄付したことにより財政が潤った。

【質疑応答】

・Q:保存館の運営を当時50人で行っていたということだが、現在は何名で運営にあたっているのか。

A:現在は30人で行っている。

・Q:現在の年間入館料収入をおおまかに教えてほしい。

A:入館料は年間で9千万円、それに加え物販で賄っている。維持費は光熱費が年間2千万、人件費で4千6百万円である。施設自体のメンテナンスは兵庫県が行っている。その他財源は適宜探しながら運営を行っている。支出に関しては、建物を増設したこともあり、毎年支出額に差がある。

・Q:保存館の学芸員の中に、地学の専門家はいるのか。

A:保存館自体に学芸員がいない。兵庫県の職員に地学の専門家がいて、その方は当時の検討委員の一人である。現在は保存館の運営にも携わっている。

・Q:地形を保つためにどんな加工が施されているのか。

A:樹脂を塗布して固めている。樹脂自体もこの保存館の断層のために特別に研究開発されたものである。また、地形の乾燥を防ぐために夜間に霧を供給するノズルを後付けしている。ノズルのメンテナンスに経費がかかる。2007年のリニューアルで、断層の地形を視覚的に浮かび上がらせるために自然光をカットし、照明で立体的に見せる演出を加えた。

以上

先進地視察報告書

業 務 名		いわき市震災メモリアル検討会議 先進地視察（中越）		
視察日時		2015.7.04（土）～7.05（日）	視察場所	長岡市・小千谷市
参 加 者	検討委員	藁谷俊史様、中島清州様、木村拓郎様、林清様、芳賀克男様、蛭田修二様、川副早央里様		
	いわき市	新妻英正部長、鈴木孝典主査、金成豪事務主任		
	トータルメディア	中尾・橋本・宮澤	記入者	宮澤

視察先	
1日目：おぢや震災ミュージアムそなえ館、川口きずな館、長岡震災アーカイブセンターきおくみらい、 2日目：妙見メモリアルパーク、やまこし復興交流館おらたる、木籠メモリアルパーク、長岡市立図書館文書資料館	
概 要	
■中越メモリアル回廊について 【概要】 ・中越大震災の経験と教訓を後世に伝えていくこと、防災・復興の研究・学習・交流活動の場となることを目指して、4つの施設と3つのメモリアルパークによって構成される。 ・震災と復興の様子を広く発信することで、支援いただいた「恩返し」につなげたいと考えている。 ・震災から7年目にあたる平成23年10月23日より順次オープン。 ・半径30km 圏内に、あえて小規模の拠点を分散させている。周遊を促し、各地域の被災状況や地理的特徴、地域文化の差異をみせる。一泊二日での視察・観光を推奨し、経済効果を生み出し、地域活性化につなげる狙いがある。 ・拠点建物はなるべく新築を避け、既存の建物を改装・転用している。 ・運営主体は中越メモリアル回廊推進協議会（長岡市・小千谷市・公益社団法人中越防災安全推進機構）。平成23年より15年間の限定事業であり、はじめ10年間は県の基金を活用して運営。その後5年間は、協議会によって運営。 ・整備・運営に関わる基金総額は19億2000万円。その他に収益事業も行っている。 ・実際の各施設の運営は NPO 法人等との協働で行っている。 ■おぢや震災ミュージアムそなえ館 【概要】 「災害体験の伝承と防災学習」をテーマに、中越大震災の経験と教訓を蓄積し、伝え、地域を担う防災人材育成を支援する。震災の3時間後（発災・被災）、3日後（避難）、3ヶ月後（復旧）、3年後（復興）の様子を伝える展示とともに、来館者のニーズに合わせた防災学習体験プログラムを提供する。一般の方をはじめ、町内会、自主防災組織、民生・児童委員の視察や研修、小中学校の総合学習に活用されている。 【ヒアリングの内容】 ・元々専修学校のパソコン教室として使用されていた建物を買収し、整備を行った。一部新築を含む。 ・住民意見交換会、有識者による展示運営委員会での話し合いにより、施設の計画を行った。 ・「楽しく学んでそ・な・えましょ！」をキャッチフレーズに、気軽に訪れられる施設づくりをめざす。震災を知らない子供たちのための次世代防災学習支援にも力を入れている。 ・地元語り部さん（19名）による講話を希望する団体向けに行っている。語り部さんは震災時に第一線で活躍した行政・民間のスペシャリストであり、講話を有料とし、講話内容を相談することで、クオリティを維持している。年80回程度開催。 ・来館者は県外者と県内・市内者は半々の割合。また、6割が団体での利用。 ・年2回、市民向けに中越メモリアル回廊バスツアーを行っている。それぞれの経験談を聞くいい機会となっている。 ・現状スペースが足りないと感じる。大型バスが2台くるときつい。整備前に来館者層の予測・リサーチをすることが必要だったと感じる。 ■川口きずな館 【概要】 川口地域の震災と復興の様子を伝える展示を行うとともに、川口地域の住民の交流と活動の場として機能する。カフェでの交流や、各種体験教室、地域づくり連続講座、コンサートなどさまざまなシーンで活用されている。周辺には運動公園、グラウンド、オートキャンプ場、宿泊施設などが併設する。 【ヒアリングの内容】 ・ゴルフ場を買収し、クラブハウスとして使われていた建物をきずな館として整備した。ゴルフ場は公園・バーベキュー場などとして活用されている。 ・震央メモリアルパークまで車で10分ほどの距離に位置する。	

■長岡震災アーカイブセンター きおくみらい

【概要】

中心市街地に位置し、「中越メモリアル回廊」の中核拠点、ゲートウェイとして、中越地域全体の震災の知見や教訓を蓄積・発信する。iPad を活用して情報検索ができる床一面の被災地航空写真や、中越大地震の記録などを視聴できるシアター、セミナー・シンポジウムが開催できる多目的ホール(80名収容)、約1000点の書籍コーナーを備える。

【ヒアリング内容】

- ・市内の大学、高専、図書館、博物館などの有識者による協議を通して、展示内容を決定した。
- ・被災地の航空写真は被災翌年春のもの。仮設住宅の位置等も確認できる。
- ・情報端末はAR 技術を活用し、床面の航空写真にあるコードを読み取ることで、震災時の写真などの情報を閲覧することができる。情報の追加・更新も可能。当時は最新技術であったが、現在では一般的になっている。

■妙見メモリアルパーク

【概要】

幅250mにわたる大崩落により、母娘が犠牲となり、男児が92時間ぶりに救出された現場が、追悼の祈りをささげる象徴的な場として整備・維持保存されている。献花台が設けられ、現在でも震災のあった時期を中心に献花が絶えない。道路は再整備されたが、崩落し信濃川に流れ込んだ土砂はそのまま保存され、現在では緑が生い茂っている。

■やまこし復興交流館 おらたる

【概要】

山古志というフィールドミュージアムの出発拠点、中山間地域の再生拠点、地域住民と来訪者の交流拠点として位置づけられている。全村避難を余儀なくされた山古志の住民の経験と教訓を後世に伝え、山古志の魅力を全国に向けて情報発信する。展示スペースは、震災時の住民の証言を軸に構成され、地形模型のプロジェクションマッピングにより中越地震の状況をわかりやすく伝える。交流スペースは、地域情報・観光案内や物産販売、休憩所として利用されている。

【ヒアリングの内容】

- ・「おらたる」とは方言で「私たちの場所」を意味し、公募によって決定した。
- ・旧山古志村役場(現山古志支所)に隣接する村民交流センター建物を活用して整備。ホール、調理室を備える。
- ・平成25年にオープンし、今月で累計来館者数5万人を達成した。12～4月の冬季の来館者は多くない。
- ・木籠メモリアルパークまで車で15分の場所に位置する。
- ・協議会とNPO 法人によって運営されている。NPO 法人は山古志地域でバスの運行も行っている。
- ・現場レベルでの連携はうまくいっているが、予算の割り振りが難しい。

■木籠メモリアルパーク

【概要】

旧山古志村木籠集落において、河道閉塞により水没した家屋がそのまま残されている。周辺には崩落した斜面跡も随所にみられる。集落を望む地点に資料館・直売所として「郷見庵」が整備され、地域によって運営されている。

■長岡市立図書館 文書資料室

【概要】

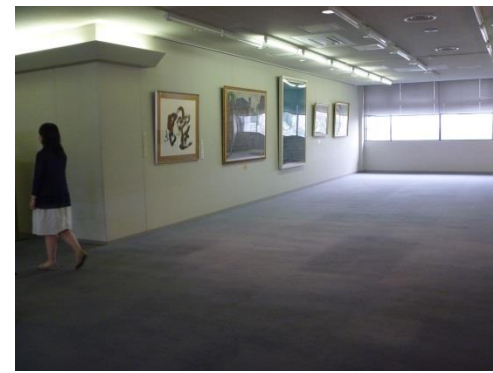
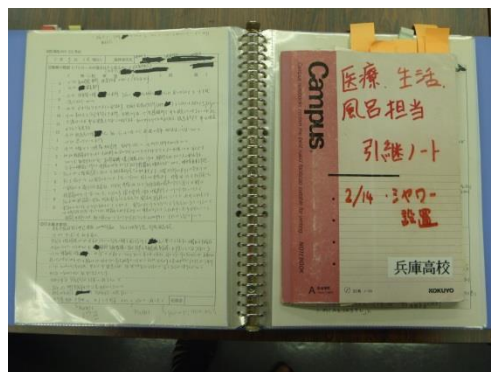
長岡市史編さん室を前身とし、平成10年に開設され、古文書・公文書等の歴史資料の整理・保存・普及活動を行っている。中越大震災に際して、被災した土蔵・家屋から救出された古文書等の歴史資料である「被災歴史資料」と、災害避難所・学校・コミュニティセンターなどから収集した災害・復興の記録である「災害復興関連資料」の収集を行った。

【ヒアリングの内容】

- ・「災害復興関連資料」とは、避難所での配布物や掲示物などが含まれる。実際に避難所・学校・コミュニティセンターを訪問し、収集を行った。総量は段ボール箱44箱にのぼり、現在約6000点の資料を整理済。資料総数は約30000点にのぼる見込み。
- ・「災害復興関連資料」の整理は、「長岡市資料整理ボランティア」を募りおこなっている。(現在約40人)ももとは古文書等歴史資料整理のボランティアであった。
- ・東日本大震災の際にも、長岡市内に設けられた南相馬市の避難所で「災害復興関連資料」の収集を行った。
- ・避難所での配布物・掲示物について、当時資料を作成した行政職員にヒアリングを行うこともある。
- ・昨年、震災後10年間の成果として「被災歴史資料」(約 25,000 点)と「災害復興関連資料」(約9,600 点)を再編成し、「長岡市災害復興文庫」を開設した。災害と復興のすがたを後世へと伝え、多様な学問分野の研究に役立つ資料となることを目指している。国立国会図書館の東日本大震災アーカイブ「ひなぎく」とデータ連携している。
- ・「災害復興関連資料」は、避難所運営などに備える際の資料としても有用である。

神戸

人・街・ながた震災資料館



- 資料室では、資料を保管・管理するのみで、貸出や閲覧を自由に行える。
- 保管している資料は、基本的に市民・区民に提供してもらったもので構成されており、公開や著作権に関しては特に厳しい制約を設けていない。

神戸

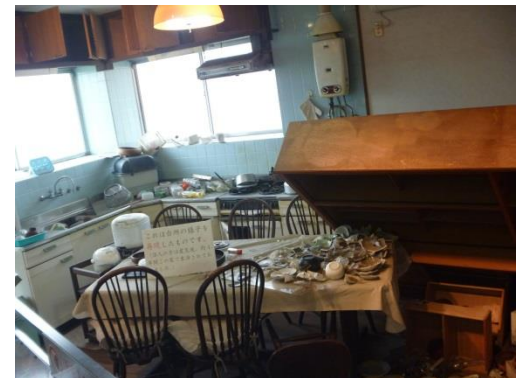
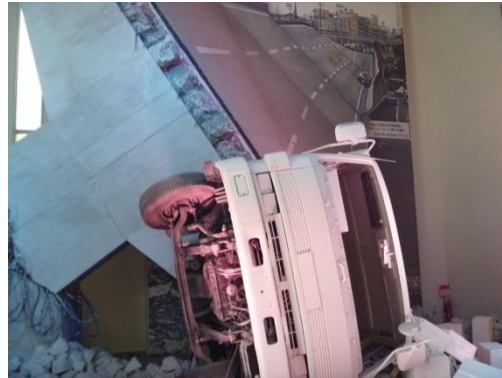
人と防災未来センター



- 4F震災追体験フロアでは、19万点の資料を展示スペースのバックヤードに収めている。そのうち800点は展示している。その中で小学生にとって難しい内容はジオラマで解説している。
- アーカイブ関係の資料は、資料が散逸してしまう可能性を防ぐため、早い段階から収集活動を行っていた。1995年1月の地震発生後、同年10月に収集保存事業を開始し、それと同時に公開基準の検討と、震災資料の所在調査も行った。

神戸

野島断層保存館



- 断層保存ゾーンでは、断層による様々な地形の変化をカメラやパネル、案内係の解説により観察できる。断層の断面が見られるトレンチ展示や触れる断層も実物で展示している。
- 震災の記憶を風化させないための震災遺構として、阪神・淡路大震災の教訓を末永く後世に伝える北淡震災記念公園に「神戸の壁」を移設し、震災から得た教訓と防災に対する意識を発信させている。

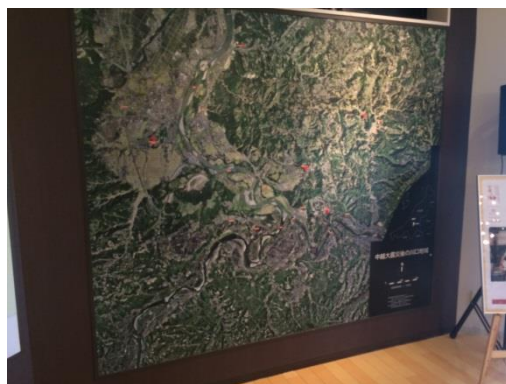
中越

おぢや震災ミュージアム そなえ館



- 「災害体験の伝承と防災学習」をテーマに、中越大震災の経験と教訓を蓄積し、伝え、地域を担う防災人材育成を支援する。
- 震災の3時間後(発災・被災)、3日後(避難)、3ヶ月後(復旧)、3年後(復興)の様子を伝える展示とともに、来館者のニーズに合わせた防災学習体験プログラムを提供する。

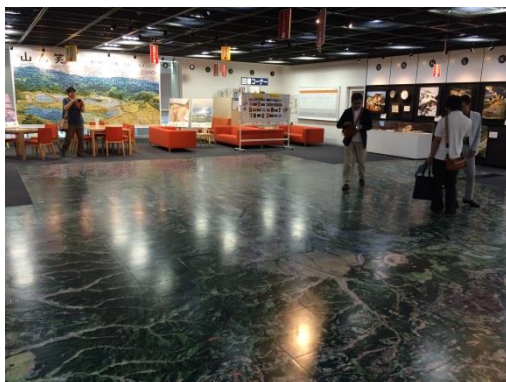
川口きずな館



- 川口地域の震災と復興の様子を伝える展示を行うとともに、川口地域の住民の交流と活動の場として機能する。
- カフェでの交流や、各種体験教室、地域づくり連続講座、コンサートなどさまざまなシーンで活用されている。

中越

長岡震災アーカイブセンター きおくみらい



- 中心市街地に位置し、「中越メモリアル回廊」の中核拠点、ゲートウェイとして、中越地域全体の震災の知見や教訓を蓄積・発信する。
- iPadを活用して情報検索ができる床一面の被災地航空写真や、中越大地震の記録などを視聴できるシアター、セミナー・シンポジウムが開催できる多目的ホール(80名収容)、約1000点の書籍コーナーを備える。

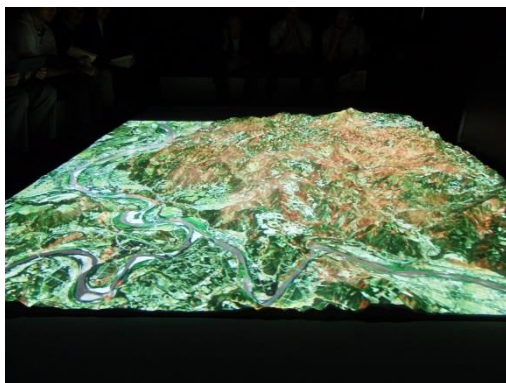
妙見メモリアルパーク



- 幅250mにわたる大崩落により、母娘が犠牲となり、男児が92時間ぶりに救出された現場が、追悼の祈りをささげる象徴的な場として整備・維持保存されている。
- 献花台が設けられ、現在でも震災のあった時期を中心に献花が絶えない。
- 道路は再整備されたが、崩落し信濃川に流れ込んだ土砂はそのまま保存され、現在では緑が生い茂っている。

中越

やまこし復興交流館 おらたる



- 全村避難を余儀なくされた山古志の住民の経験と教訓を後世に伝え、山古志の魅力を全国に向けて情報発信する。
- 展示スペースは、震災時の住民の証言を軸に構成され、地形模型のプロジェクションマッピングにより中越地震の状況をわかりやすく伝える。
- 交流スペースは、地域情報・観光案内や物産販売、休憩所として利用されている。

中越

木籠メモリアルパーク



- 旧山古志村木籠集落において、河道閉塞により水没した家屋がそのまま残されている。
- 集落を望む地点に資料館・直売所として「郷見庵」が整備され、地域によって運営されている。

中越

長岡市立図書館 文書資料室



- 中越大震災に際して、被災した土蔵・家屋から救出された古文書等の歴史資料である「被災歴史資料」と、災害避難所・学校・コミュニティセンターなどから収集した災害・復興の記録である「災害復興関連資料」の収集を行った。
- 昨年、震災後10年間の成果として「被災歴史資料」(約25,000点)と「災害復興関連資料」(約9,600点)を再編成し、「長岡市災害復興文庫」を開設した。国立国会図書館の東日本大震災アーカイブ「ひなぎく」とデータ連携している。